

英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析：『小学唱歌集』を中心として

佐藤，慶治

<https://doi.org/10.15017/1470221>

出版情報：地球社会統合科学研究. 1, pp.19-28, 2014-09-10. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：



英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析

— 『小学唱歌集』を中心として —

サ トウ ケイ ジ
佐 藤 慶 治

1. 導入

近代日本における音楽教育については1872年、今日に続く近代教育の基礎である「学制」が發布された際に、小学校の一教科としての「唱歌」が定められたが、資料や実際の指導者もなく、更には「当分のヲ欠ク」という註がなされており、当初は有名無実な教科であった。明治政府は1871年に編輯寮を設置し、教科書の編纂と翻訳に着手するが、「唱歌」に関しては全く手を付けられず、その後、1879年に公布された教育令においても状況は変わっていない。そこで、師範学校調査のため1875年より米国へ派遣され、1878年に帰国していた伊澤修二(1851～1917)らの提唱により、文部省は1879年に東京音学校の前身である音楽取調掛を創設し、伊澤を掛長に任命する。伊澤は、米国留学時代の自身の師であったルーサー・ホワイティング・メーソン(1818～1896)を、音楽取調掛における音楽の指導者として日本に招聘し、1881年から1884年にかけて、わが国最初の音楽教科書である『小学唱歌集』全三編を発行する(初編が1881年、第二編が1883年、第三編が1884年にそれぞれ発行される)。この教科書は初編に33曲、第二編に16曲、第三編に42曲と、全三編において91曲の楽曲を掲載しているが、その三分の二強が外国語楽曲に日本語の歌詞をつけた所謂「翻訳唱歌」と呼ばれるものであり、『小学唱歌集』の場合、主に英米とドイツの民謡や歌曲、賛美歌、さらにはメーソンの編纂した児童用音楽教材集である *NATIONAL MUSIC CHARTS* や *NATIONAL MUSIC READERS* の楽曲を原曲としている。この「翻訳唱歌」の歌詞に関しては「原曲の歌詞を翻訳し、次いで曲を分解して、日本の伝統的な詩の形式に従って作詞しやすくした上で、分解した曲に合わせて歌詞の修正を加えた」とされるが¹⁾、これらの歌詞は大半が、稲垣千穎ら音楽取調掛員による翻訳であることが判明している。また、『小学唱歌集』は唱歌の目的を「徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ」と規定しており、さらにその機能を「人心ヲ正シ風化ヲ助クル」ことにあると位置付けている²⁾。実際に、教育史学者の唐澤富太郎による『小学唱歌集』の

楽曲歌詞内容の分類を見ても³⁾、全91曲のうち52曲が忠君愛国的、教訓的な内容を持っており、これらのことから考えても、この時点で日本の音楽教育は既にナショナル・アイデンティティの創造を担っていたと言えよう。明治時代初期において、国際社会で欧米列強と対峙することを迫られた「日本」という新しい国家にとって必要なことは、「日本」を近代的な国民国家に造り替えることであったが、それまでの「日本」には、政治的な統一はあっても、民の、自分達が「日本国民」であるという帰属意識は皆無であった。伊澤は1884年の『音楽取調掛報告書』において、プラトンの古代ギリシャ旋法理論、エートス説を引用することにより、唱歌は単なる個人の人格形成のみならず、共同体の形成や維持に資する意味を持つものであるということ論じているが⁴⁾、それはまさしく当時の「日本」に必要とされていたものであった。音楽教育によっていわば「国民づくり」を行うというこの方式は、紆余曲折を経ながらも基本的には第二次世界大戦まで継続される

2. 先行研究と本論文の位置付け並びに方法

唱歌教育に関しては、近年の日本において多くの研究が行われており、『小学唱歌集』を取り扱った研究としては、まず第一に山住正巳による『唱歌教育成立過程の研究』が挙げられる。この研究書は、山住が発掘した唱歌教育の史料、すなわち音楽取調掛の書簡や書類を精査して、その成果をまとめたものであり、一次資料を多く取り扱っているという事で、唱歌教育史の研究資料として第一級のものである。しかし山住自身が記述しているように、この本では唱歌歌詞の考察については断片的にしか行われていない。同じテーマを含んだものとしては、東京藝術大学音楽取調掛編の『音楽教育成立への軌跡』、中村洪介著の『近代日本洋楽史序説』等が挙げられる。また最近では、日本語学者である山東功著の研究書『唱歌と国語 明治近代化の装置』において、『小学唱歌集』を中心とした唱歌歌詞の意味と音楽取調掛編纂の文法書との関係における考察が行われており、歌詞選定を中心

として唱歌の作成の背景を論じている点に興味深い。その他に、伊澤修二の生涯や思想を扱っている奥中康人著の『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』、『小学唱歌集』の歌詞内容による分類を行っている唐澤富太郎著の『教科書の歴史』などを、本論文の主要な先行研究著作として挙げる。また、諸外国においても日本の近代化を扱った研究は存在しており、日本の洋楽導入史をとりまとめた Atsuko Watanabe-Gross 著の *Einführung der europäischen Musik in Japan* が音楽取調掛の設立と発展について詳しく考察している。更に先行研究論文としては、『小学唱歌集』の各楽曲の出典に関する研究として、言語文化学者の櫻井雅人による論文「唱歌集の中の外国曲」が主要なものである。

本論文の目的は、『小学唱歌集』における英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞と、その原曲の歌詞の翻訳を比較分析し、『小学唱歌集』の翻訳唱歌歌詞における「教育的」な内容の出所を考察することであるが、それによって唱歌の歌詞というプリミティブな部分を通じ、音楽取調掛がどの程度独自に教育的内容を付随させたのかということ、つまりどの程度自由に外国語楽曲の歌詞を改変していたのかという事を考察出来ると考えられる。

筆者は以前、拙稿「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」において、やはり『小学唱歌集』における翻訳唱歌の歌詞を分析し、その「教育的」な内容が必ずしも音楽取調掛による後付けではないことを考察できた⁵⁾。本論文においては、その対象を英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌としているが、これは当時のアメリカにおける音楽教育教材から採られたものが多い。よって本論文は、唱歌歌詞の「教育的」な内容の分析と共に、当時の米国の音楽教育に関する考察を含んでいる。

3. 各曲の歌詞分析

唐澤による『小学唱歌集』の歌詞分類は、大きく「自然・生活・行事に関するもの」、「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」、「教訓的なもの」の三つであるが、本論文では特に「国民づくり」というキーワードより、「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」と「教訓的なもの」を扱う。その条件を満たし、唱歌歌詞と原詩に相関性が見られるものとして、16番、48番、77番、80番、86番、88番の6曲について本論文で考察する。原曲の出典は言語文化学者の櫻井雅人による⁶⁾。また、唱歌歌詞は『教科書啓蒙文集』を参考とした⁷⁾。

(1)『小学唱歌集』の第16曲、『わが日の本』の考察を行う。唐澤の分類によると、「君が代を祝うもの」であり、

原曲は賛美歌の *There is a happy land* である。これはメーソンの音楽教材集に収録されており⁸⁾、原詩はアンドリュー・ヤングによるもの。唱歌歌詞は日本の四季の美しさを歌っており、直接的な「君が代」に関する歌詞はないが、「もろこしびとも高麗びとも、我らが日本のかすんだ日ざしを見て春を知る」というような日本を中心としたものの見方にそれを感じられる。英語原詩の方は、神によって作られた幸せの国、すなわちキリスト教における天の国を歌ったものであるが、「国」というテーマを中心としている点で唱歌歌詞と一致し、キリスト教における神の恩寵である「幸福」というサブテーマを、「君が代」からのめぐみである「四季」⁹⁾に置き換えて作詞したものと考えられる。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第十六 わが日の本

- 一 わがひのもとの。あさぼらけ。
かすめる日かげ。あふぎみて。
もろこし人も。高麗びとも。
春たつけふをば。しりぬべし。
- 二 雲間にさけぶ。ほとゝぎす。
かきねにほふ。うつぎばな。
夏来にけりと。あめつちに。
あらしひつぐる。花ととり。
- 三 きぬたのひゞき。身にしみて。
とこよのかりも。わたるなり。
やまともろこし。おしなべて。
おなじあはれの。あきの風。
- 四 まどうつあられ。にはのしも。
ふもとのおちば。みねのゆき。
みやこのうちも。やまざとも。
ひとつにさゆる。ふゆのそら。

There is a happy land

- 1 There is a happy land, far, far away,
Where saints in glory stand,
bright, bright as day.
Oh, how they sweetly sing,
worthy is our Savior King,
Loud let His praises ring, praise, praise for aye.
- 2 Come to that happy land, come, come away;
Why will ye doubting stand, why still delay?
Oh, we shall happy be,
when from sin and sorrow free,
Lord, we shall live with Thee,
blest, blest for aye.

- 3 Bright, in that happy land, beams every eye;
Kept by a Father's hand, love cannot die.
Oh, then to glory run;
be a crown and kingdom won;
And, bright, above the sun, we reign for aye.

《幸せの国》

- 1 遠く遠くに幸せの国がある。
そこでは日の光のように輝かしい聖者達が、
栄光の内にある。
ああ、彼らの歌の美しきこと、
我らが救世主の王に相応しい。
彼の賞賛の声は、永久に響き渡る。
- 2 来たれ幸せの国に、入るがいい。
何故汝らは疑い、そしてぐずるのか？
ああ、我々は罪と悲しみから逃れ、
幸福になるだろう。
王よ、私達は汝と共にあり、永久に祝福します。
- 3 あの幸せの国では、全ての目が光り輝く。
父の手に保護され、愛は絶えることがない。
ああ、栄光の囲い場は、
王冠と王国となり勝利をもたらす。
そして太陽より高く光り輝き、
私達は永久に統治する。

(2) 第48曲、《太平の曲》の考察を行う。唐澤の分類では「君が代を祝うもの」であり、原曲は *Keller's American hymn* と *Angel of peace* である。前者はマサイアス・ケラーによって作詞作曲され、シートミュージックとして出版された¹⁰⁾。後者はそれにオリヴァー・ヴェンデル・ホームズが、National Peace Jubileeの際、新たな詩をつけたものであるが¹¹⁾、伊澤は『唱歌略説』においてこの2曲を混同している。唱歌歌詞は、一番が戦乱の世が静まり君が代を祝う内容、二番が京都から東京へ遷都がなされて明治天皇の治世を称えるものとなっているが、主に *Keller's American hymn* を参考にしていと言えよう。この曲もアメリカの独立戦争をテーマとして作詞されており、唱歌の「御功績あふげ」という歌詞は、原詩の「称えよ、我らの国と旗を三度称えよ」と重なる。そして原詩ではジョージ・ワシントンという実在の人物の名前を出しており、唱歌において明治天皇の名前を直接出していないのは、それが不敬にあたるからだが、百敷の宮よりむさしの国へ移動（東京に遷都）、代は百二十ということから、明治天皇を歌っていると推察できる。また、一番の「あめつちさへも。とゞろくばかり」という歌詞は、「遠くより、歌の声押し寄せる」という *Angel of peace* 一番の歌詞イメージから来たものだろうか。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

り」という歌詞は、「遠くより、歌の声押し寄せる」という *Angel of peace* 一番の歌詞イメージから来たものだろうか。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第四十八 太平の曲

- 一 ゆはづのさわぎ。飛火のけぶり。
いつしかたえて。をさまる御世は。
あめつちさへも。とゞろくばかり。
万代までと。君が代いはへ。
- 二 たひらのみやこ。百敷の宮。
みあとになして。むさしの国に。
しづまりましぬ。年は三千とせ。
代は百二十。御功績あふげ。

Keller's American hymn

- 1 Speed our Republic, O Father on high,
Lead us in pathways of justice and right;
Rulers as well as the ruled, one and all,
Girdle with virtue, the armor of might!
Hail! three times hail to our country and flag!
- 2 Foremost in battle, for Freedom to stand,
We rush to arms when aroused by its call;
Still as of yore when George Washington led,
Thunders our war-cry, We conquer or fall!
Hail! three times hail to our country and flag!
- 3 Rise up, proud eagle, rise up to the clouds,
Spread thy broad wing o'er this fair western world!
Fling from thy beak our dear banner of old!
Show that it still is for freedom unfurled!
Hail! three times hail to our country and flag!

《ケラーのアメリカ賛美歌》

- 1 栄えよわれらの共和国、天の父よ、
我々を正義と公正の道へ導け、
統治者は統治される者と同じく善い、一と全、
善を取り巻く、権力の御印。
称えよ、我らの国と旗を三度称えよ。
- 2 戦いの中で真っ先に、自由は立ち上がった。
我々は戦いに駆けつける、
それによって目覚めさせられた時、
その昔、ジョージ・ワシントンに導かれた時、
雷鳴が戦いで轟き、征服し、あるいは落ちた。
称えよ、我らの国と旗を三度称えよ。
- 3 誇り高き鷲よ、雲に向かって飛び上がれ、

この晴れた西の世界を超えて、
そなたの広き翼を広げよ。
我らの敬愛する古き旗印を嘴に携えて飛べ。
自由の旗が広がるのを見よ。
称えよ、我らの国と旗を三度称えよ。

Angel of peace

- 1 Angel of peace, thou hast wandered too long;
Spread thy white wings to the sunshine of love!
Come while our voices are blended in song,
Fly to our ark like the storm-beaten dove?
Fly to our ark on the wings of the dove;
Speed over the far-sounding billows of song,
Crowned with the olive leaf garland of love;
Angel of peace, thou hast waited too long!
- 2 Brothers we meet on this altar of thine,
Mingling the gifts we have gathered for thee;
Sweet with the odors of myrtle and pine,
Breeze of the prairie and breath of the sea?
Meadow and mountain and forest and sea;
Sweet is the fragrance of myrtle and pine,
Sweeter the incense we offer to thee,
Brothers once more round this altar of thine!

《平和の天使》

- 1 平和の天使よ、そなたは長きに亘ってさ迷っていた。
愛の日光へと、そなたの純白の翼を広げよ。
我らの声が、一体となって歌っている時に来い。
叩きつける嵐のように、我々の箱舟へと飛べ。
精霊の羽で飛んでこい。
遠くより、歌の声が押し寄せる。
オリーブの葉による愛の冠で飾られ、
平和の天使よ、そなたは長きに亘って待っている。
- 2 兄弟たち、我々は彼の祭壇で会う。
汝のために集めた贈り物を混ぜる。
ギンバイカとマツの甘い香り。
大草原と、海の息吹の微風。
牧草地と山地と森と海。
甘いものは、ギンバイカとマツの香り。
甘い芳香を彼に捧げる。
兄弟たち、もう一度祭壇を囲もう。

(3) 第77曲、《楽しわれ》の考察を行う。唐澤の分類によると「勉学・勤勉」を歌ったものであり、原曲は、メーソンの音楽教材集より *Evening song* である¹²⁾。原詩は勤労と時間の神秘をテーマとした、やはりキリス

ト教的な歌だが、唱歌歌詞では原詩一番の「もし私が日々の仕事を正しく終え、そして全ての職務を成し遂げたなら、太陽が沈んで夜の闇の濃くなる頃には、幸せが私に与えられる」という歌詞、また二番における「時間を無駄にしてはならない」という教訓的なテーマが使用され、明治時代に重要とされていた勤労、勤勉をテーマとした歌になっている。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第七十七 楽しわれ

- 一 たのしわれ。まなびもをへ。
日もくれぬ。あすもまた。
朝とくより。学ばまし。
かくて年月。たえせざらば。
月の桂をも。われぞをるべき。
- 二 うれしわれ。ふみよみはて。
ひもくれぬ。あすもまた。
朝とくより。勉めまし。
かくてとし月。撓まざらば。
龍の腮なる。玉もとるべし。

Evening song

- 1 If I've fulfilled my daily task aright,
And ev'ry duty done,
Then joy to me when darkest shades of night
Shall could the sinking sun;
How cheering, then, how calming,
The golden ling'ring ray,
The eventide is charming
That ends a well-spent day.
- 2 But woe to him whose eye that hour is dim
With sin-repenting tears;
No anguish ever can restore to him
The joys of wasted years.
Oh, precious are the power
And time that God has giv'n!
May I each passing hour
Lay up some store in heav'n.

《夕暮れ時の歌》

- 1 もし私が日々の仕事を正しく終え、
そして全ての職務を成し遂げたなら、
太陽が沈んで夜の闇の濃くなる頃には、
幸せが私に与えられる。
何と楽しく、何と穏やかだろう。
黄金のゆつたりとした輝き。

夕暮れは魅力的だ。
 その終わりは、善き日の終わり。
 2 しかし、ほの暗い時間、
 彼の目には罪と苦痛の涙がある。
 どんな苦痛も彼を回復させない。
 過ぎ去った年月の喜び。
 ああ、大切なものは力、
 そして神の与えた時間なり。
 過ぎ去った時間は、
 天の貯蔵庫にある。

(4)第80番、《千草の花》の考察を行う。唐澤の分類では、「勉強・勤勉」を歌ったものであり、唱歌三番の「跡あるものは。筆の花。かをりをのこせ。後のよに」という歌詞は、世の美しきものはいずれもはかないものであるから、それより勉強に励み、「筆の華」、すなわち歌文の類を残せという教育的なものである。原曲は、やはりメーソン音楽教材集より *Autumn song* であるが¹³⁾、こちらは純粋に自然を歌ったものであり、教訓的な部分は存在しない。秋になって自然が枯れはててしまうという原詩のイメージを、唱歌では「はかなきものか。よの中は」と表現し、明治時代に重要とされていた勤労・勤勉というテーマを音楽取調掛が後付けしたと推測できる。唱歌の歌詞も、「千草の花」、「萩の花」や「もみち」などの季語からして秋を歌っており、その点でも一致する。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第八十 千草の花

- 一 千草の花は。露をそめ。
 野中の水は。月やどる。
 そまらぬいろと。空のかげ。
 はかなきものか。よの中は。
- 二 錦をよそふ。萩の花。
 もみちをさそふ。夜はの霜。
 夢野のあとゝ。消ゆかば。
 木枯ばかり。あれぬべし。
- 三 はかなきものを。誰めでん。
 きえゆくものを。たれとはん。
 跡あるものは。筆の花。
 かをりをのこせ。後のよに。

Autumn song

- 1 Soon from the bough descending,
 The last red leaf shall fall;
 The birds their songs are ending,

The world is silent all.
 Ah! whither are they vanished,
 Whose blithe songs were our delight?
 The hoarfrost all hath banished
 Far o'er the mountain height.
 2 O'er desert fields and meadows
 In sadness now we stray;
 Now sooner come night's shadows
 And shorter grows the day.
 The birds are elsewhere seeking
 For the sunny smile of Spring;
 Oh, what a merry-making
 Its charms to them will bring
 3 What though from bough descending
 Now falls the last red leaf,
 And birds their songs are ending,
 As though oppressed with grief?
 Oh, banish all your mourning
 Nor so tremblingly despair;
 We soon shall see returning
 The lovely Spring so fair.

《秋の歌》

- 1 すぐに大枝が下がり、
 最後の赤い葉が落ちるだろう。
 鳥たちは歌うのをやめ、
 世界は全てが静かになる。
 ああ、彼らはどこに消えたのか、
 彼らの陽気な歌声は、我々の喜びだった。
 霜は遠く遠くの山の上まで、
 全てを覆い隠す。
- 2 見捨てられた野原と草原をこえ、
 我々は悲しみのうちにさ迷う。
 やがて夜の帳が訪れ、
 日は短くなる。
 鳥はさ迷い求める、
 日の笑う、春の土地を。
 ああ、何と素敵な創造物、
 それは彼らを魅了する。
- 3 大枝は下がり、
 今や赤い葉は散った。
 そして鳥たちは歌うのをやめた、
 まるで悲しみに暮れているように。
 ああ、お前の悲しみはすべて消えてしまったのだ、
 絶望に震えるな。
 我々はすぐまた相見える、

美しく、愛らしい春と。

From which none ever wakes to weep.

(5) 第86曲、《花月》について考察を行う。唐澤の分類によると、「人倫・人生」を歌ったものであり、原曲はマーガレット・マッケイ作詞、ウィリアム・ブラッドベリー作曲による *Asleep in Jesus!* である¹⁴⁾。原詩はキリスト教における休息、すなわち死をテーマとしたものであり、やはり人生の教訓となるものであるが、花月の美を歌う唱歌とは一見関連性がないように思える。しかし、「心たのしきは。花のめぐみなり」、「こゝろ静けきは。月の恵なり」というのは原詩の「苦痛も恐れもない、おぼろげな時間、それは救世主の力により在る」という部分と通ずるものがあり、神道の神=自然であるということを考えるとこの改変は不自然ではない。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第八十六 花月

- 一 花を見る時は。こゝろいとたのし。
心たのしきは。花のめぐみなり。
- 二 月をみる時は。心しづかなり。
こゝろ静けきは。月の恵なり。
- 三 よきをみて移り。悪をみてさけよ。
朱に交はれば。あかくなるといふ。

Asleep in Jesus!

- 1 Asleep in Jesus! blessed sleep!
From which none ever wakes to weep;
A calm and undisturb'd repose,
Unbroken by the last of foes.
- 2 Asleep in Jesus! Oh, how sweet
To be for such a slumber meet;
With holy confidence to sing
That death hath lost its painful sting!
- 3 Asleep in Jesus! peaceful rest!
Whose waking is supremely blest;
No fear, no woe, shall dim that hour
That manifests the Saviour's power.
- 4 Asleep in Jesus! Oh, for me
May such a blissful refuge be!
Securely shall my ashes lie,
Waiting the summons from on high.
- 5 Asleep in Jesus! far from thee
Thy kindred and their graves may be;
But there is still a blessed sleep,

《神の御許で眠れ》

- 1 主の御許で眠れ、祝福された眠り。
泣きながら起きている者はいない、
静かな、乱れなき休息。
それを壊す敵はいない。
- 2 主の御許で眠れ、あなんという甘さ、
このような眠りと出会って。
聖なる信頼と共に歌う、
苦痛は去ってしまったことを。
- 3 主の御許で眠れ、平和な休息、
それは最高に祝福された眠り。
苦痛も恐れもない、おぼろげな時間、
それは救世主の力により在る。
- 4 主の御許で眠れ、ああ私にとって、
この上なく幸福な保護であるだろう。
私の横たわった亡骸は守られ、
天からの召喚を待つ。
- 5 主の御許で眠れ、そなたは離れる、
そなたの一族と彼らの墓所から。
しかしそこには祝福された眠りがある。
泣きながら起きている者はいない。

(6) 第88曲《祝へ吾君を》についての考察を行う。この曲は、唐澤によって「君が代をうたうもの」に分類されており、原曲はメーソンの音楽教材集より *Song of the fatherland* である¹⁵⁾。キリスト教における神を、日本における天皇に置き換えたものであり、連の最後にそれぞれ「いはへいはへ。君の為。わが国を」、「神の手で休め、敬愛する御父の国」という歌詞が入っているなど、共通する部分も多い。唱歌の「いはへ」という言葉は原詩の「祝福」の翻訳であろう。また、神と天皇の恩恵によって、それぞれの国が成り立っているという部分も一致する。以下に唱歌歌詞、原曲歌詞、原詩の翻訳を記載する。

第八十八 祝へ吾君を

- 一 祝へ吾君を。恵の重波(しきなみ)。やしまにあふれ。普ねき春風。草木もなびく。
いはへいはへ。国の為。わが君を。
- 二 祝へ吾国を。瑞穂のおしねは。野もせにみちて。しろかね黄金。花咲(はなさき)栄ゆ。
いはへいはへ。君の為。わが国を。

Song of the fatherland

- 1 Father land, rest in God's own hand!
When we speak thy name so proudly,
Ah, what magic in the spell!
When we hearty worth praised loudly,
Raptures then the bosom swell.
Thee God's arm shield from harm!
Rest in his own hand, dearest fatherland.
- 2 With sweet rest may'st thou e'er be blest!
Joy with thee can flourish never,
Save upon the plains of peace;
God to trust be thy endeavor,
Else prosperity must cease.
God is near, thee to cheer;
Rest in his own hand, dearest fatherland.
- 3 Justice' sway naught can lead astray;
When it all our laws protecteth,
God is ready to befriend;
And when truth our minds directeth,
Blessings on our acts attend.
These pursue, to God true;
Rest in his own hand, dearest fatherland.

《御父の国の歌》

- 1 御父の国、神の手で休め。
我々が誇りを持ってそなたの名前を言う時、
ああ、その何と魅力的な響き。
我々がそなたの価値ある賞賛の響きを聴く時、
歓喜が胸の内を高まる。
神の手によって害悪より守られる。
神の手で休め、敬愛する御父の国。
- 2 甘い休息は、そなたの永遠なる祝福と共に。
そなたと共にある喜びは、永遠に栄える。
平和な野を守れ。
神を信用しようと努める者、
その他の幸福は必ず終わりがある。
神はそなたの喜びの傍におられる。
神の手で休め、敬愛する御父の国。
- 3 正義の道は、迷いとは無縁である。
我々の法が全て守られる時、
神は困っている者を救うだろう。
そして、真実が我々の心を導く時、
我々の行いは祝福を得る。
これらの求道は、神の真実へとつながる。
神の手で休め、敬愛する御父の国。

4. 結論

前章で6つの唱歌歌詞の分析を行ったが、かなりの教育的内容が原詩からそのまま使用されていたと言える。やはり諸所の文献において見られる、「明治時代における翻訳唱歌は日本で勝手に道徳的内容が付加されており、原詩とは全くの別物である」¹⁶⁾ という意味合いの記述は必ずしも正しくないことを結論付けたい。米国で作られた楽曲の歌詞の教育的性は、だいたいところがキリスト教義に基づいているが、それをうまく教訓のみ取り出したり、また、神を天皇に置き換えるということによって、『小学唱歌集』の翻訳唱歌は作成された。現代の日本における音楽教育は、その主目的を「芸術音楽による情操の育成」という点に置いていると言えるが、当時の音楽教育の主目的は、第一章に記述したとおり「国民づくり」であった。ならば逆説的に言って、当時の日本に教育的な歌詞を輸出することができた、当時の米国の音楽教育とはいかなるものであったのだろうか。

米国においては1740年以降、本格的な賛美歌が普及し始めるが、それは1720年のボストン唱歌学校設置から始まったものである。ここでは主に牧師が賛美歌を指導していたが、これは公的なものではない。その後、1780年代より、唱歌学校が米国全土に増加し、人々の音楽教育への関心が高まる。その結果、ボストン市民の援助によって、米国音楽教育の祖であるローエル・メーソンが、1832年に児童のためのクラスも含めたボストン音楽学校を設立する。ここでは主に「ペスタロッチ主義唱歌法」が取り入れられるが、これは当時の米国の教育界が、ヨーロッパの教育思想の輸入を推進しており、また、米国に公教育としての音楽教育を根付かせるためには、ペスタロッチの思想を用いて必要性を説くのが効果的であったためと推測される¹⁷⁾。啓蒙主義、ネオヒューマニズムから派生したハインリッヒ・ペスタロッチの教育思想は民族教育主義であり、その音楽教育の目的は、芸術音楽への導きではなく、人格の養成であった。ブリッジウォーター師範学校において伊澤に指導を行ったルーサー・ホワイトティング・メーソンも、やはり、1839年にボストン・アカデミーに入学し、その影響を受けるが、ペスタロッチ主義唱歌法の訓練的な方法に反対して独自の方法を開発したホーマンにも強い関心を抱き、自著には児童の自発性に期待する教育法の内容も積極的に取り入れている。このような動きと共に、音楽を正課として取り入れる学校がボストンを中心として増加し、1880年頃には全国で250校にも達する。

以上をもって本論分を締めくくることが、上記の歌詞分析結論の他、これまで日本語訳の存在していなかった7曲

の英語楽曲の翻訳を掲載できたことも本論文の成果に含めたい。今後の課題としては、『小学唱歌集』以外の明治時代における翻訳唱歌歌詞分析を行っていくと共に、同時期の米国の音楽教育状況をより詳しく調査し、日本の音楽教育政策と比較考察を行うことが挙げられる。

注

- (1)山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』(講談社, 2008) p.68
- (2)伊澤修二著, 山住正巳校注『洋楽事始』(平凡社, 1971) p.110-113
- (3)唐澤富太郎『教科書の歴史』(創文社, 1956) p.135-139
- (4)渡辺祐『歌う国民』(中公新書, 2010) p.17-18
- (5)佐藤慶治・平和孝嗣・松信浩二「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」(熊本大学教育実践研究第31号, 2014)
- (6)櫻井雅人「唱歌集の中の外国曲:『小学唱歌集』を中心として(1)(2)」(言語文化第41, 42号, 2004, 2005)
- (7)倉田喜弘校注『教科書啓蒙文集 新日本古典文学大系 明治編11』(岩波書店, 2006)
- (8)Sharland, Holt, and Mason, *The Fourth Music Reader*, p.126 以下、邦訳は筆者による
- (9)「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」p.107より、『小学唱歌集』第50曲の《やよ御民》においても同様に、四季が「君が代」からの贈り物とされている。
- (10)*Franklin Square Song Collection*, No.4 (1887) p.76
- (11)*Franklin Square Song Collection*, No.4 (1887) p.77
- (12)Luther Whiting Mason, *Second National Music Reader*, p.50-51
- (13)Luther Whiting Mason, *Third National Music Reader*, p.22
- (14)<http://www.hymnary.org>におけるシートミュージックより出典
- (15)Luther Whiting Mason, *Third National Music Reader*, p.32
- (16)『歌う国民』p.57などを例として挙げる。
- (17)供田武嘉津『西欧音楽教育史』(音楽之友社, 1991) p.200

主要な参考文献

- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会 1967年
- ・奥中康人『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』春秋社 2008年
- ・伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始』平凡社 1971年

- ・松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』和泉書店 2011年
- ・山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』講談社 2008年
- ・唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社 1956年
- ・供田武嘉津『西欧音楽教育史』音楽之友社 1991年
- ・Atsuko Watanabe-Gross, *Einführung der europäischen Musik in Japan*, Hambrug 2007

A study on Japanese songs of the “Shogaku Shokashu” in comparison to the English originals.

Keiji Sato

The Japanese government in the Meiji period promulgated school education policies known as *gakusei* in 1872, after the Meiji revolution. Those policies were an imitation of Western compulsory music education. The music subject was called *shoka*, but there were no teachers and no textbooks in Japan, so in October 1879 the Ministry of Education, Science, Sports and Culture established the music education research institution “*Ogaku-Trishirabe-Gkari*” . The chief of *Ongaku Torishirabe Gakari* “Shuji Izawa, brought over Luther Whiting Mason, (who taught school music education to Izawa at Bridgewater Teachers College in Boston) and published a the first music textbook in Japan—the “Shogaku -Shokashu.” It contains 91 Japanese school songs, but many of them are based on foreign originals, like German folk songs or English hymns and school songs. As a result of the educational policy of the Meiji government, 52 songs are didactic in nature or contain lyrics praising the spirit of patriotism and loyalty to the leader.

This paper aims at identifying the abovementioned contents in the songs of the “Shogaku -Shokashu” by comparing the translations to the original English texts. The lyrics of the “Shogaku -Shokashu” are not exact translations and some papers insist that didactic content was added afterwards in Japan. Then how much of such content did the *Ongaku Torishirabe Gakari* add? In other words, how many liberties were taken when translating the lyrics? This paper seeks answers to these questions through a comparison of lyrics. It also examines contemporary music education in U.S. schools, because many pieces in the “Shogaku Shokashu” are based on American school songs.